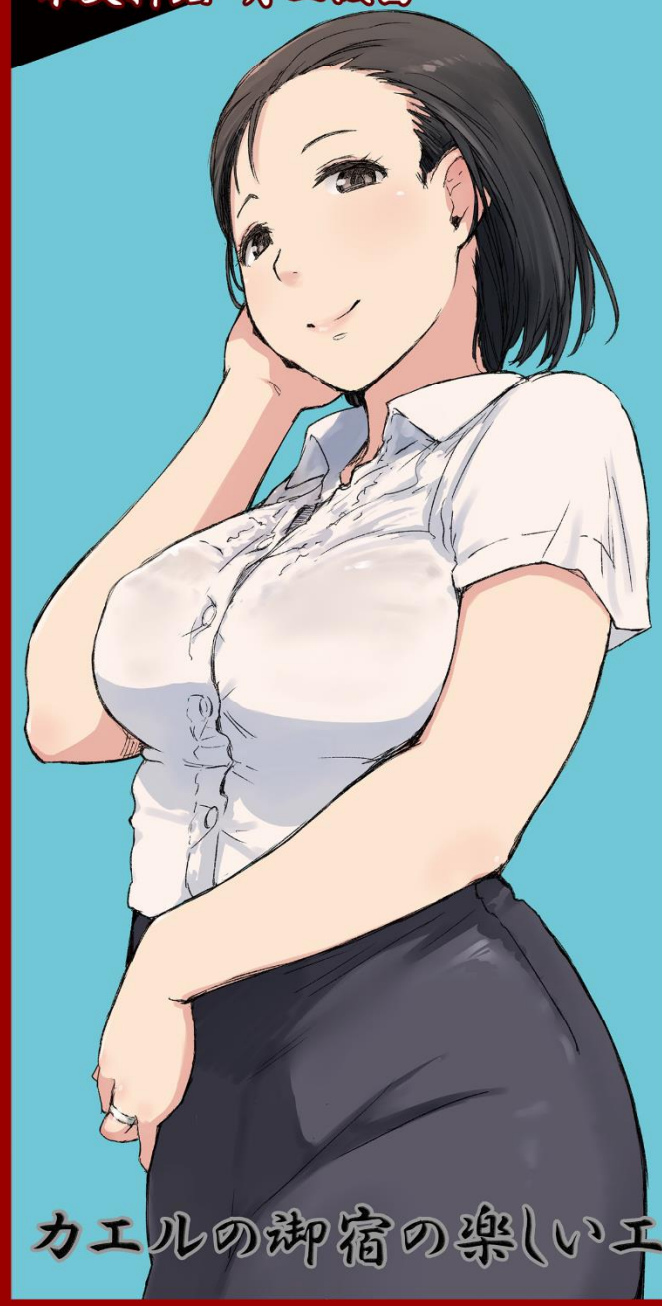
本文テキスト・蛙雷
表紙・本文挿絵・あらくれ
本文挿絵・月工仮面

人妻 律子～外伝
もう一人の男



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止

カエルの御宿の楽しいエロ小説

男に襲われている彼女を助けようとすれば
助ける事ができたかもしれない……
いや、助ける事が出来た筈だ。
だけど僕は、彼女を助ける事もせずに
男に犯される彼女の姿を物陰に隠れながら見続けた……

人妻 律子シリーズ
『外伝～もう一人の男』

目次

「憧れ」……3
「犯される彼女」……5
「憧れを犯す」……11
「再び彼女を犯す」……18
「その後の彼女」……27
あとがき……29

本文テキスト　蛙雷
表紙・挿絵　あらくれ
挿絵　月工仮面

『憧れ』

運命という奴は、なかなか面白い事をしてくれる……そう感じたのは、面白くない仕事だと思いながらも、食うためだと思って続けている宅配便の配送業務をしている時の出来事……配送先で偶然に出会った彼女を見た時に、それまでも面白くもないと感じていた日々が一変する事になった。

暑い日……噴き出てくる汗をぬぐいながら配達物を届けた玄関先、チャイムを押して反応を待ちながら、早いところ荷物を渡して、多少なりともクーラーが効いている車に戻って買い置きしたお茶りを飲みたいなどと考えながら待っていた僕の前に彼女は唐突に現われ出でた。

玄関先に出てきたのは、年齢は二十代の半場から後半くらいと言った感じの女性で、なかなかの美人……と言うよりは、可愛らしいと言う表現の方が似合う雰囲気の女性だった。

（なかなか良い女だな……）

そんな事を思いながらも早いところ受け取りのサインを貰って、車に戻ろうと考えていた時に……

「あっ、ちょっと待っててください」

そう言って家の奥に引っ込んで行った彼女……何をしてるんだろうと思った僕の前に彼女は戻ってきた。

「暑い中に御苦労様です。よろしかったら飲んでくださいな」

そう言いながら僕の前に差し出されたのは、冷たい麦茶と氷が入ったコップだった。

「すいません、ありがたく頂きます」
そう言って差し出されたコップを受け取り、僕はその冷たい麦茶を飲み干す……冷たい麦茶が喉を潤す……そして空になったコップを彼女に返した。
「どういたしまして」
空になったコップをにっこりと笑いながら受け取った彼女……その時に姿勢が少しだけ前かがみになり、服に少し大きめな隙間が開き彼女の服の中が見える……服の下に着ている下着……薄いベージュ色のブラジャー……それも少し浮いており、その下に隠されていた淡い色の乳輪の辺りがチラリと見えた。
それは一瞬の事であり彼女は気がつかず、また僕もあわてて視線をずらして平静を装う。
「そ、それじゃ……ええと、自分はこの付近の配達担当になんで、これからもお届けに上がる事があるかもしれませんので、此方こそ宜しく御願いします」
「はい、此方こそ、これからも宜しく御願いしますね。お仕事頑張ってください」
そう言って優しく微笑む彼女は、受取の伝票に名前を書く……永島律子……それが彼女の名前だった。
そして彼女の家から出てきた時には彼女の事が好きになっていた……僕にとって特別の存在になっていた。
単なる宅配便の配達人でしかない僕に対して、御苦労様と優しく話しかけてくれて、暑い時だったという事もあって麦茶などを入れてくれた彼女、その優しくて朗らかな性格と美人というよりは、可愛らしいといった形容が似合っている容姿に、玄関先でほんの少し話をしただけだと言うのに、僕は彼女に一目惚れ……いや憧れの存在とになったと言った方が正解だろうか？
そんな特別の存在になってしまった。
それ以来、彼女の所に届け物がある時は、その日がとても楽しくて、一日中幸せな気分になる事ができた。
もしも彼女が独身であったなら、清水の舞台から飛び降りる様な覚悟を決めた末に、何らかのアプローチをしたかもしれなかったが、残念ながら彼女は人妻であり、優しそうな旦那さんと可愛らしい子供が一人おり、僕が入り込むような隙を見出す事は出来ず、人間としての常識と言うか平凡なモラルがある僕は、単に彼女に憧れるだけであり、特に彼女を如何こうしようなどと言う大それた事は考えていなかった……いや正直言えば、考えはしたが、それを実行に移す度胸と言うか勇気が無かった。
それは自分にとっても彼女にとっても良い事だと思って、自分勝手だが許される範囲ギリギリ……秘かにスマホで隠し撮りをした彼女の画像を見て、届かぬ思いに溜息を漏らす事くらいしかできなかった。
（無論の事、溜息以外にも漏らすと言うか、出す物は色々とあったのだが……）
そう……あの時までは……

『　犯される彼女　』

何度か彼女の家に宅配の荷物を届け、それなりに多少なりとも見知った仲となり、玄関先で簡単な会話が出来る様になって彼女の事をおぼろげながら知る事が出来た。

彼女は最近必死をしてきたという事や、旦那さんと子供の三人暮らしであるという事とか、彼女の年齢が２８歳であるという事とか……そんな風に多少とも親しくなれたと思っていた頃、僕は色んな事情が重なって仕事を辞め、郷里に帰る事になった。

仕事を辞める事は、それほど大した事でもなかったが、これから彼女に会う機会がなくなってしまうという事の方が残念であり、少々気落ちする事となった……

そしてあと数日で郷里へと帰る事になった日の休日、引っ越し道具の買い出しに出かけたついで……と言うわけでもないが、もうすぐ彼女がいる街から居なくなってしまう事に寂しさを感じた僕は、買い物をした引っ越しの道具をぶら下げたまま、何時の間にか彼女の家の近くまで足を延ばしていた。

特に何か行動を起こすとか、変な下心があった訳でもなく、ただ運が良ければ遠くから彼女の姿を最後に見る事が出来るのではないかと言う思いが、彼女の家の近くまで来た時に、さらに僕の足を運ばせた。

そして気がつけば、彼女の家の前に立って玄関のチャイムを押そうとしている自分の姿に気がつく……

（僕は何をしようとしてるんだ……）

玄関のチャイムを押そうとした時に我に返って、思わず赤面してしまう。

未練がましく僕は、何をしようとしてるんだ？

玄関チャイムに触れている僕の指先……それを僕は、ポケットに仕舞い込む……そしてそのまま彼女の家の前から立ち去ろうとしたとした時、家の中から何か気配と言うか物音が聞こえた様な気がした。

「あれ？」

聞こえた様な気がしたのは……微かに聞こえてきたのは、何か物をひっくり返すような音、そしてその物音に交じって、彼女の声が聞こえた様な気がした……その彼女の声は悲鳴のように思えた。

何だろうと考えながら僕は、少し迷いながら玄関のドアへと耳を押し付けて、中の様子を探るように聞き耳を立てる。

僕の耳に聞こえてきたのは、何か争うような彼女の悲鳴交じりの声と聞き覚えのない男の乱暴な声……

大人しくしろ！　無駄な抵抗するな！　無駄な事だよ！　男の乱暴な声……

いやぁ！　やめてぇぇ！　助けて、誰かぁぁ！　彼女の助けを求めるような叫び声……

ドアから耳を引き離し、驚きのままに玄関のドアノブに手をかけてを回すと鍵はかかっておらず、ドアはあっりと開き、僕は彼女の家の中へと入り込んでいった。

さらにはっきりと重なり聞こえてくる彼女の悲鳴と乱暴な男の声、家の中で何が行われているのか？

想像する事など簡単にできた。

僕は、彼女の声に誘われるように、声が聞こえてきた方向……恐らくはリビングと思しき家の奥の方へと足を踏み入れ……そして僕は見た……想像した場面と同じ光景を……いや想像した場面よりも衝撃的な彼女の姿を！

僕が彼女の家の中で見たのは……リビングで見知らぬ男によって、押し倒され！　着ている服の上から胸

を揉まれ！　スカートへと手を突っ込まれ股間を嬲られ！　強引に今まさに犯されようとしている彼女の姿があった。

彼女を襲っている男、男に襲われている彼女……互いに必死になり、ある意味互いの事しか目に入っていない状態の二人にとって、秘かにその行為を覗き込んでいる僕の姿など目に入らない、仮に入ったとしても気が付かない状態だった。

そんな状況なのだから、男に襲われている彼女を助けようとすれば助ける事ができたかもしれない……いや、助ける事が出来た筈だ。

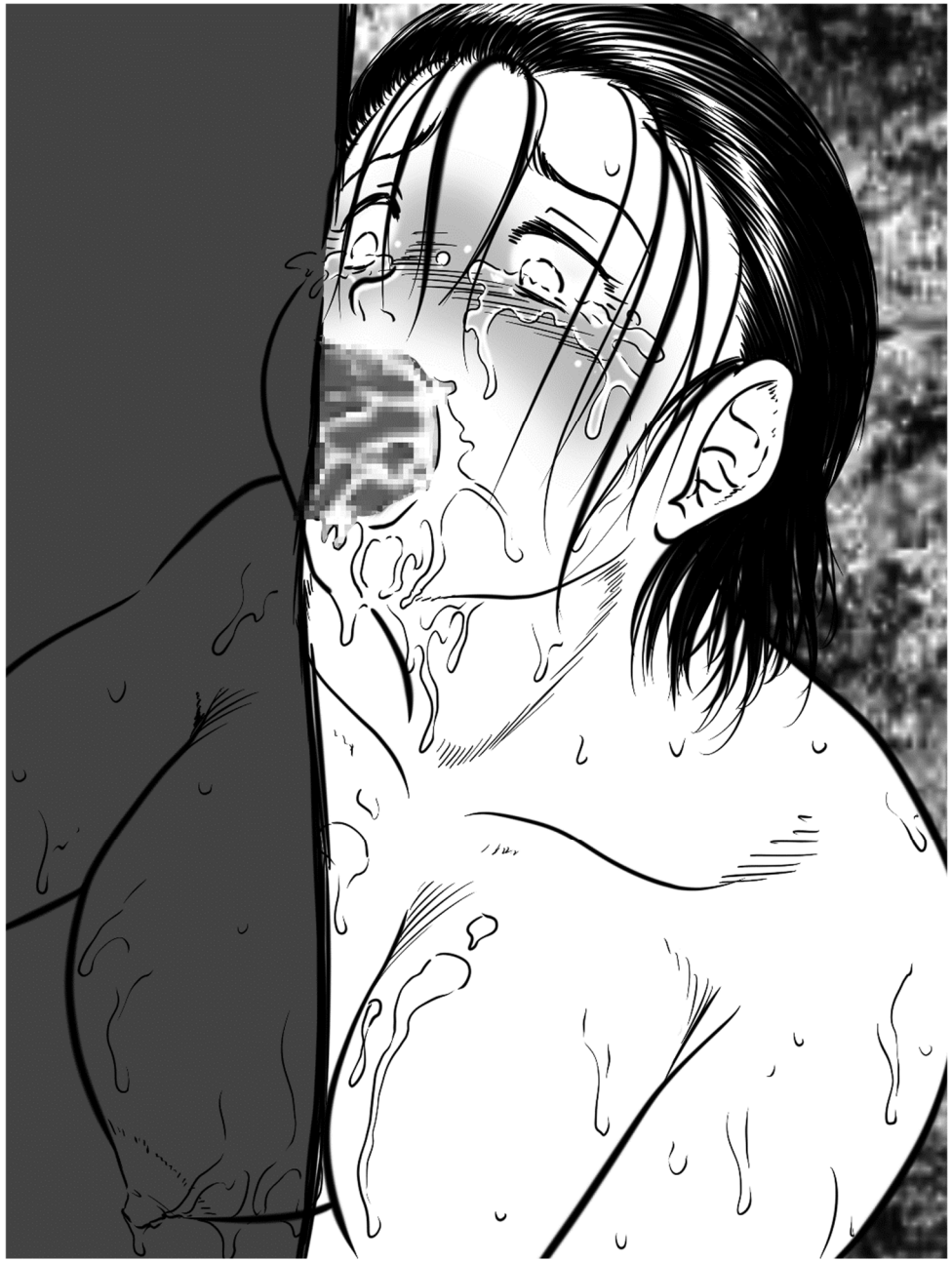
だけど僕は、彼女を助ける事もせずに、男に犯される彼女の姿を物陰に隠れながら見続けた……

それどころか男に犯されようとしている彼女の姿を手持ちのスマホに撮影した……その彼女が犯されていく一部始終の姿を……

悲鳴と抗いの声を出しながら、必死になって覆いかぶさり襲ってくる男の手から逃れようと足掻く彼女だったが、その抵抗も無駄な事でしかなかった。

大の男の力の前で、彼女のようなか弱い女性が抵抗し切れる筈もない、男の手によって身に着けている白いエプロンが剥ぎ取られ、ブラウスの前を大きく広げられ、スカートをずり降ろされ、持ち上げられた両足からパンストが引き裂くように脱がされ、露になった下着がずり上げさせられながら引きちぎられ、次第に全裸へとさせられていく彼女の姿……

恐怖に歪む悲痛な表情、乱れた髪が顔に張り付き、大きく開け広げらえた口から吐き出される悲鳴、露にされた白く大きな乳房がぶるぶると大きく動きながら、その先端にある小さな乳首を揺らめかせる。

やめてください！　おねがいしますから、おねがい！　いやぁぁ――！

吐き出される彼女の悲鳴に被さる様に聞こえてくるのは男の乱暴な声……
どうせ何度も犯らせたじゃねぇか……
あの時は亭主の寝ている前で喘ぎまくってたぜ……
大人しく早すませないとガキが帰ってくるぞ……
そして彼女は悲鳴交じりに抗い叫び続ける……
あなたが強引に……もう、やめてぇぇ！
卑怯者！　あの人は彼方に薬を飲まされていて……いやぁぁ！
子供の事は言わないでぇ！　お願い……お願いだから……だめぇぇ！
彼女と男の言い争うような会話から、今回が初めてではなく、過去に何度も彼女は男に犯され続けているという事を僕は漠然と感じ取る事が出来た……
こうしてこの場面を見ながら思い返せば、最初に出会った時に比べて、何となく彼女の様子が最近おかしかった様な気がしないでもない……果たして何時頃から彼女は、男によって犯され続けていたのだろうか？
そんな事を考えながら、彼女が男によって犯されていく場面を見ていると、ほとんど着ている服を脱がされ、裸にされた彼女が、髪をつかまれ引き起こされ上半身を持ち上げられた。
これから彼女は何をされるのか？
これから男が彼女に何をさせるのか？
ある行為を想像しながら僕は見続ける。
そして僕が予想した通りの事を男はし始めた。